

暫く合掌してゐた婢が、一つの堂の後ろに潮の満干がわかる壺がある筈だといふので、ガサゴソと落葉を踏みしめて、樹々の葉を洩る微かな月光をたよりにその辺りを探して見たが、暗がりの隅に小さな祠があつて前に古井戸らしいものがあるばかりだつた。婢がそつと蓋を除いて見たが、それでもないらしかつた。

『えらうしんくしますな』

と婢が呟いた。堂宇の間から射し込む月光に、奥の山肌が蒼白く照しだされてゐるのが氣味が悪い。燐寸をすつて見たがすぐに消えて、求める壺は解らなかつた。止むなく月を眺めながら境内を一廻りして、山門の仁王を見て元の道に戻つた。

石橋を渡りながら婢がこの寺の縁起を話した。子供の頃聞いた話だといふので、話す方にも聞く方にも充分にはのみこめない。昔「系もん三郎」といふ悪人が巡錫の大師の鉄鉢を打叩いたら、鉄鉢は八つに碎けて其日から「系もん三郎」の八人の子達は日毎に一人づゝ死んでいった。後年善心に返つた「系もん三郎」は罪亡ぼしの巡礼に出て旅で臨終が迫つた時、元の大師に巡り会つて成仏させて貰つた。その「系もん三郎」が再びこの地に生れ代つて来た時に掌に、石の玉をしっかりと握りしめてゐたといふのが筋道だつた。

『その玉はお釈迦さまの日にお寺で見せますさうな、何でも黒い綺麗な石にごさるますさうな』

一番の客を心待ちにゆっくり歩いたが、いつか城山の灯も道

後の灯も間近く見えて来た。

この辺りは蛍の名所ときいたが、帰り路にもやうやく一匹しか見なかつた。その一つの蛍を婢は珍らしさうに道端の草にごんで捕へた。

『お寺へお詣して、殺生なことですな』

といひながら、背の帯の間から紙を取りだして蛍を包んだ。もう夜も大分更けたらしい。(大正8年7月13日 伊予道後にて)

## 地しんには

### 一向平氣な僕も

原稿を書く折の癖で、前夜も徹夜してゐたので朝の新聞を読んで眠つた僕は、音ならぬ物音で眼が覚めた。激いぢしんだと氣が付くなり、揺動く畳の上を隣室に駆込んで行くと、病床の父はちやうど障子に攫さらまれた処だつた。言葉を掛けるなり父を抱へて一方の手で障子を掴むと凄まじいしん動だつた。壁土が壊落ちる。襖障子が倒れる。空氣の激動が物凄くて、恰も暴風雨の真只中に佇たつつ心地だつた。この間、垣根の外に何か解らない水の渦巻と、父の片手にあつた体温器が強く眼にあつた。最初のしん動が鎮つて初めて家の中を見廻すと其処ら中乱脈だつた。横着よこぢな故もあらうが、由来ぢしんには一向平氣な僕は、余り